国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成28年9月1日発行　第40巻第9号通巻第468号

月刊みんぱく

2016 9月号

特集 見世物大博覧会

見世物と人びと　笹原亮二
見世物絵とわたし　川添裕
生人形　福原敏男
人間ポンプ・こぼればなし　鵜飼正樹
ニセモノとミセモノ　川村清志

日本人は世界一フィギュアが嫌いな国民

宮脇 修一

プロフィール
1957年生まれ、大阪府出身。ガレージキットの先駆メーカーであり、のちに食玩ブームの仕掛け人となった、造形集団・株式会社海洋堂を率いる。著書に『造形集団 海洋堂の発想』（光文社新書）、『「好きなこと」だけで生きぬく力』（WAVE出版）

海洋堂という造形集団がフィギュアという市場を生み出し、三〇年以上作品を発信し続けたことで、昨今は世間様への認知度も少しは高まり、それなりに評価も受けることができるようになった。お陰様で今は博物館、美術館、動物園、水族館などのミュージアムショップ公式商品など数多くの仕事を受けることが出来るようになっている。その際に私がまず先方に発する言葉が「日本人は世界一フィギュアが嫌いな国民です。そのことをよく認識してお仕事を進めなければなりません」である。当然、先方はそれを聞いて「?」となる。彼らとしてはフィギュアという商品は非常によく売れていて、海洋堂はそれで人気を博し仕事をしていると思われているようだが、それはまったくの幻想で、よくよく考えてみればどこの家庭の応接間やオフィスにもフィギュアが飾られているのを目にしたことはないはず。日本建築の中に装飾として組み込まれるのは襖、欄間、掛け軸、衝立……すべて二次元のもので、立体物はせいぜい陶器の壺や一輪挿し。フィギュア的なリアルな造形要素のあるものはない。これまで「人形」という日本語の意味するところは英語の「ドール」とイコールでしかなく、「フィギュア」の概念を持つことはなかった……云々、これ以外にも日本人がいかにフィギュア、立体物、模型にお金を出さないかをいつも一時間以上かけて説明することになる。

ただ、そのお金を出して買ってもらえない、家に飾られないフィギュアが大いに評価され、人気を得られる場所はある。今も日本各地の美術館、百貨店の催事などで開催されている海洋堂のフィギュア展示イベントは、常に注目を集め、高い集客率を記録している。そこで展示されているのは、これまで海洋堂が製作してきた動物、恐竜、戦車、歴史……ありとあらゆる森羅万象を立体化、フィギュア化した、いわば「フィギュアの見世物小屋」。

先に日本人は世界一フィギュアが嫌いと記したが、正確なところは、フィギュアにお金を出し、購入してまで自分の空間に置いておきたくはない国民性、ということだと思う。

海洋堂が製作した、小さく、精密で、コレクション性が高く世界観があるものにはとりわけ興味を持っていただけているようだが、ゆえに我々海洋堂は、これからもフィギュア／立体造形作品の魅力をより多くの方に知っていただくために、「フィギュアの見世物小屋」興行を各地で展開していくのである。

月刊 みんぱく
9月号目次

1 エッセイ 千字文
日本人は世界一フィギュアが嫌いな国民
宮脇 修一

特集 見世物大博覧会

2 見世物と人びと
笹原 亮二

4 見世物絵とわたし
川添 裕

5 生人形——市井の人びとの写実造形
福原 敏男

7 人間ポンプ・こぼればなし
鵜飼 正樹

8 ニセモノとミセモノ
川村 清志

10 ○○してみました世界のフィールド
ネパールで水牛肉を加工し、売り、食する
中川 加奈子

12 みんぱく Information

14 味の根っこ
ムームー
深川 宏樹

16 文化遺産おもてうら
消される声
——カタルーニャ独立運動のなかの人間の塔
岩瀬 裕子

18 手芸考
物語る服、服の物語——行司千絵の手しごと
村松 美賀子

20 ながなんぢゃ
消えゆく名前?——バリ島の名付けと少子化
吉田 ゆか子

21 次号予告・編集後記

特集 見世物大博覧会

すごいモノ、珍しいモノ、ハラハラするモノ……。見世物はなぜ、人びとを惹きつけてきたのか。特別展「見世物大博覧会」の開催に合わせ、さまざまな時代・多種多様な形態の見世物の世界を紹介する。

特別展　見世物大博覧会
会期　二〇一六年九月八日（木）から十一月二十九日（火）
会場　国立民族学博物館　特別展示館

見世物と人びと

笹原亮二（ささはらりょうじ）　民博 民族文化研究部

見世物小屋の賑わい

見世物と聞くと、あまりよくない印象を抱く人が多い。「見世物になる」「見世物にしたくない」といった表現には、いずれも見世物に対する否定的な意味合いがうかがえる。しかし、現在は否定的な印象が先に立ち、相当分が悪い見世物も、以前は必ずしもそうではなかった。

一七世紀初めの京都の四条河原を描いた絵画には、高い柱から張り下ろした綱につかまって芸当をおこなう蜘蛛舞、足で弓矢を操る楊弓（ようきゅう）、珍奇な獣や鳥の見世物などの興行の様子が見られる。時代が下がり、当時の江戸や大坂などの街を描いた絵画にも出し物の絵看板や幟（のぼり）を掲げた見世物小屋が建ち並ぶ盛り場が見られる。社寺の境内の絵画にも、幟を掲げた見世物小屋が建っている光景が描かれている。当時の錦絵には、見世物小屋を背景に洒落た着物の男女を描いたものもあり、流行のスポットとなっていたことがうかがえる。

明治時代に入ると、以前からのそうした見世物小屋に加え、見世物の常設館やさまざまな出し物を一カ所に集めた見世物興行もあらわれた。横浜のような新興地の盛り場でも盛んに見世物の興行がおこなわれるようになり、各地の見世物は大勢の見物人を集めて賑（にぎ）わった。

人びとを魅了したカラダとモノ

見世物小屋では多種多様な見世物がおこなわれ、大勢の人びとを魅了した。修練を積んだ演じ手のカラダによる技芸の見世物には、宙に張り渡した綱の上で離れ業を演じたり、足で大小の物品や人間を操ったりする軽業（かるわざ）、独楽を巧みに操る曲芸、水を自由自在に出し入れする奇術などがあった。モノの見世物では、籠目を編んで人物や動物を作り上げる籠細工、貝や珊瑚などの同一素材で奇抜な造形を作る一式細工、巧みな仕掛けで本来動かないモノを動かすからくり細工、生きているような精巧な造りの生人形や色とりどりの菊花をまとった菊人形のほか、ラクダやゾウやインコやオウムなどの珍獣珍禽（ちんきん）の見世物も盛んにおこなわれた。

内容がさまざまな見世物にも共通する特徴が見て取れる。そのひとつは、生身の感覚の回復とでもいえばいいだろうか。人びとは、綱渡りで演じ手が突然倒れ込むと、はっと息を飲み、思わず声を漏らす。演じ手が火を噴くと、頬に熱を感じ、燃えた臭いが鼻をつく。菊人形を凝視すると菊の芳香が漂ってくる。いずれの場合も、人びとは感覚が直接強く刺激され、その働きが鋭敏さを増したように感じるのではないだろうか。

もうひとつは、虚実の区分が明確ではなく、それが必ずしも問題とはならないことである。紙の蝶が宙に舞うとき、蝶は実物ではないが紙の蝶は実物であり、まがい物と目くじらを立てる人はいない。陶磁器で作った人物像は、実物の人間ではないが陶磁器の造形物としては実物であり、人間が巧みに表現されていれば、賞賛されてもまがい物と非難されることはない。

見世物の効用

こうした見世物の特徴は、日常生活における人びとの快不快や虚実の感覚とはかなり趣が異なる。人びとにとって、快不快や虚実の区別は明確で、不快や虚を否定し、排除して快い真の生活の実現が目指される。しかしそれは、不合理や矛盾に満ちた日常生活の実態を考えれば、明らかに非現実的である。それができて快い真の生活が実現したと思えたとしても、それは幻想どころか、より憂慮すべき事態である。そうした幻想に浸るうちに、快不快や虚実が混交し、不合理や矛盾に満ちた現実に十全に感応し得る、生身の感覚が退行したり喪失したりしたことのあらわれかも知れないからである。

そう考えると、見世物は、いささか逆説めくが、人びとがそれに接することで、快不快や虚実が混交し、不合理や矛盾や葛藤に満ちた日常生活に十全に対応し得る、強靱（きょうじん）な生身の感覚の回復を果たす効用をもつといえそうである。見世物だからこそそうした効用を持ち得ると、見世物をもっと肯定的にとらえてもいいのではないか。

古今珍物集覧 元昌平坂聖堂に於て　明治5・1872年　国立民族学博物館蔵 H0253748

絵看板　軽業・足芸一座　明治22・1889年ごろ
国立民族学博物館蔵 H0213141　5枚組のうちの1枚

浅草奥山に於て興行 当年三才七ヶ月
明治9・1876年
国立民族学博物館蔵 H0230729

見世物絵とわたし

川添裕　横浜国立大学教授

浮世絵のなかに「見世物絵」とよばれるジャンルがある。

それは江戸時代から明治半ばごろまでの見世物興行を描いた浮世絵や絵番付のことで、軽業・足芸曲持・曲馬などの「曲芸」（図1）、籠細工・貝細工・生人形などの「細工見世物」（図2）、ゾウ・ラクダ・トラなどの「動物見世物」と、描かれるものはバラエティ豊かである。今回の国立民族学博物館の特別展「見世物大博覧会」では、わたしのコレクションを含め多くの見世物絵が展示されるので、このジャンルを知る絶好の機会となっている。

図1：早竹虎吉の曲芸「筑紫飛梅」（2代国貞画『大坂下り早竹虎吉西両国広小路に於興行仕候』大判錦絵竪2枚続、安政4・1857年）

見世物絵を集める

わたしが見世物絵を集めだしたのは一九八三年のことで、当時は平凡社の雑誌『太陽』の取材記者をしていた。まだ二〇代であった。もともと根っからの芸能好きで、一九七〇年代のアングラ演劇をはじめ、新劇、ダンスから歌舞伎、落語までを楽しんでいたが、次第に江戸時代以来の芸能にひかれるようになり、なかでも見世物にはまることとなった。「日常にないもの」や「あり得ないようなもの」を実際に目の前に出現させ、それが短時日で消え失せてしまう見世物は、芸能の核心と思えたのである。

そして、そんな見世物がもっとも盛んにおこなわれていたのは江戸時代後期であり、そこを自分で研究したくなった。その際、文字資料もむろん大事だが、何といっても「見る」ことによって成り立つ見世物では、見世物絵という絵画資料こそが興行の様子を知る手がかり。自分でそれを目の前に置いて親しく接し、研究すべきだとの「天啓」が下り、見世物絵の収集と研究を始めたのである。本業では程なくして書籍の編集部に移り、そこの同僚たちが「イメージを読む」「絵を読む」という方法論に着目していたことも大きな刺激となった。

見世物絵を求めて、東京や地元の横浜はもちろん、全国の浮世絵商や古書店へ足をのばした。一五年ほど熱狂的に身銭を切って集め、併行して公共機関、所蔵家での調査を進めていくと、このジャンルについてはほぼ把握できるようになった。元手がかかっているので、文字通り身命をなげうって勉強し、二〇〇〇年には最初の著書『江戸の見世物』（岩波新書）を出版できた。

図2：亀井斎の籠細工・酒呑童子（初代国貞画『江戸の花　籠細工』大判錦絵3枚続、文政2・1819年）

コレクション公開への思い

この間、とくに浮世絵商の皆さんにお世話になった。店頭などで見せてもらった累計数万点の浮世絵のなかから見つけ出したコレクションであり、また、彼らの特別な協力なしに珍しい資料を手にすることは不可能であった。例えば『駱駝之図』（図3）は、京都の浮世絵商Y氏を仲介に、神戸のさる著名な浮世絵コレクターからご割愛いただいたものである。名古屋の浮世絵商K氏は、わたしの収集意図をよく理解してくれ、例えば近年も珍しい出雲神事舞（折敷舞）の見世物絵（図4）などをお世話いただいた。

これまで、たばこと塩の博物館で開催の特別展「大見世物」（二〇〇三）にコレクションのうち百点弱を出品して公開し、今回の民博での展示でも数十点を出品しているが、数百点ある全体は残念ながら公開できないでいる。何とか死ぬまでには実現したい、と思っている。

※本エッセイ中の浮世絵４点は川添コレクションより。

図3：日本全国を廻ったラクダの見世物（国安画『駱駝之図』大判錦絵2枚続、文政7・1824年）

図4：江戸の両国で見世物として興行された出雲神事舞（国兼画『出雲国神事舞畧説　神事舞之内折敷舞』大判錦絵、文政8・1825年）

生人形――市井の人びとの写実造形

福原敏男　武蔵大学教授

精巧な生人形

マネキンのような等身大の生人形は、一九世紀半ばより見世物興行で人気を博した。木製人形表面の木地に胡粉を塗って人肌のつややかな質感を出し、生人形師松本喜三郎作品のなかには性器まで作り込まれた精巧なものもあり、リアリズムとエロティシズムで魅了した。川添裕氏によると、生人形興行の全般的主題は非現実的趣向とされ、喜三郎のデビュー作「鎮西八郎嶋廻り」（源為朝の異界における空想冒険物語）などが代表作とされる。しかし、生人形の現存作例はほとんどない

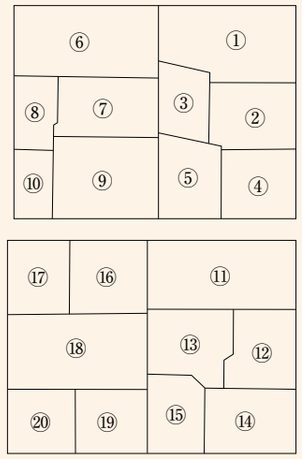
喜三郎の新境地

喜三郎の第二弾が好色な趣向と取締まりを受けた結果、彼は安政四年（一八五七）大坂での第三作として、巷の人びとの日常生活を象った新境地を開拓した。大木透氏によると、「あって四十八癖」を表現した「浮世見立四十八曲」は、大坂や江戸の人びとを子細に観察して描いた下絵を元に造形化さ

れた、という。喜三郎は万延元年（一八六〇）浅草寺開帳で興行し、斎藤月岑は「喜怒哀楽の情態をうつし、さながら生ける人に向ふがごとし」と記し、浮世絵「当世見立生人形四十八曲」（歌川芳艶画、さいたま市蔵）が興行全体を総覧する。右上から全二〇場面四八体を見ていこう。①乳母がいじわるして、赤子に見知らぬ老人を見せて泣かせ、老人はあわてて赤子をあやし、下女がポカンとした間抜け面、②くしゃみする女と脈を取る医者、③大掃除の最中眼に入った埃を取る、④風呂釜に火を吹く女と熱湯を我慢する男、⑤中年女が縁側で癇癪を起こし、あきれている若い女、⑥糠で肌を手入する人気遊女の黛、楊枝を使う遊女、入歯を取った遣り手婆、⑦遊廓座敷にて旦那、遣り手、太鼓持の睨めっこ（顔拳）、⑧ぬっと出た夜鷹（売春婦）に肝を潰して酒徳利を落とす男、⑨三人三様上戸、⑩草履に付いた汚物を嗅ぐ女、⑪長読経で足がしびれて立てない僧侶、隠れ笑いの女、縁側で待遠しい男、⑫耳をかく女、帳場での思案顔、⑬義太夫、三味線を伴奏する女、それを聞く盲人、⑭折檻癖の内儀が振り上げた長煙管の下でちぢみあがる丁稚、⑮夜道での生酔い侍と臆病な供連、⑯千ケ寺廻り巡礼でくたびれ顔の男女、⑰髪結いが客の元結いのため、毛先を口で引き、客の眼尻が吊り上る、⑱鳥追い女が唄を歌い、男が踊り、罪人を連行する侍が見入る、⑲召使い女を連れて出かけた御殿女中が遠眼鏡を覗く、⑳田圃での情事、のろけている男を騙そうとする女。

作品には武士に対する風刺も効き、滑稽な諧謔味の溢れる姿、面白い表情や動きを追い求め、誇張もあろうが細部にこだわっている。

万延元年（1860）、浅草奥山で興行された生人形、浮世絵「当世見立生人形四十八曲」（4枚続、本来横一列に並ぶ）さいたま市蔵



名も無き人びとの日常の様子を象る

ライバル安本亀八は同万延元年、喜三郎を真似て、熊本本妙寺の加藤清正二五〇回忌において四十七癖生人形を興行した。しかし、大木氏によると、喜三郎独得の人肌を表す煉りと胡粉の顔料作りの秘法の方が、亀八よりも一日の長があったという。

従来、生人形とは伝奇伝説や歴史的事件の場面を仕組んだ興行とされるが、さまざまな身分、職業の、生身の老若男女の日常生活を象った興行に注目するのも一興であろう。

人間ポンプ・こぼればなし

鵜飼正樹　京都文教大学教授

人間ポンプとその追随者

「人間ポンプ」。この名を名乗り、碁石や金魚や硬貨を飲み込んで吐き分ける不思議な芸を演じる芸人が、少なくとも三人いた。

昭和一五年から一六年にかけて芸能界を席捲した、元祖人間ポンプ・有光伸男（一九一七―二〇〇五）。テレビのビックリ人間番組やドラマで活躍した園部志郎（一九二三―一九九五）。そして、見世物小屋の舞台で演じ続けた安田里美（一九二三―一九九五）。

人間ポンプを名乗らずとも、同様の芸を演じた芸人は少なくない。「人間クジラ」「胃袋魔人」「人間ゴジラ」などなど。芸もネーミングもインパクトが強いせいか、演じた芸人の名前は不明なことも多い。

人間ポンプ・有光伸男公演ポスター　長崎県対馬市の映画館での公演で使用　昭和30年代か　個人蔵

四万十川支流で水死した「人間タンク」

四年前のことである。インターネットで「人間くじら出現」という文章を見つけた。「土佐おもしろ人間行状記」というシリーズで、読売新聞高知版に連載されていた記事らしい。

記事によれば、昭和二六年ごろ、旧西土佐村（現四万十市西土佐）の公会堂に「人間くじら」が来て、ガラスやクギ、タマゴを飲んで、そのまま吐き出す芸で人を驚かせた。その後、人間くじらは村の浪花節語りの娘と一緒になったが、川で溺れて亡くなったという。

翌年二月、高知県立図書館で高知新聞のデータベースを検索したところ、「〝人間ポンプ〟水死」という記事を発見した。昭和二九年八月三一日の記事である。「二十九日午前十一時半ごろ住所不定芸人「人間ポンプ」こと松本清氏（四二）は幡多郡津大村目黒川端へ魚を獲りにいき水泳中ショックによる心臓麻痺を起して水死した」という、わずか六行のベタ記事だ。

予定を変更して、すぐに旧西土佐村に向かった。レンタカーを借り、村の中心部から四万十川の支流をさらに奥へ分け入った旧津大村で、あちこち尋ねたすえに、夕暮れどきにたどりついた小さな集落で見かけた、犬を連れたおじいさんが、「村の浪花節語りの娘」の弟だった。しかも、目の前を流れる川が、まさにその事故の現場だという。

ご自宅で奥さんもまじえてうかがった話では、川で溺れた男の名前はたしかに松本清といい、岐阜出身。ただし、人間くじらでも人間ポンプでもなく、「人間タンク」を名乗っていた。

安田興行社　人間ポンプポスター　昭和40年代前半　個人蔵

人間タンクと人間ポンプを結ぶ糸

人間タンク・松本は、金魚や碁石を飲み込ん

で吐き出したり、電球を飲み込んで胃のなかを照らし出したりする芸を演じた。サイコロを飲み込んで、リクエストどおりの目を出すこともできた。浪曲の幕間に演じることが多かったが、その見事さに拍手が鳴り止まなかった。普段でも、値段どおりに口から硬貨を出して買いものをしたり、飴を吐き出して子どもをあやしたりしたという。

松本が溺れ死んだのは、酒を飲んで川に入ったためだった。死後はどこかの大きな病院が解剖することになっているという話も聞いたが、連絡のしようもなく、葬式を出したそうだ。松本の遺骨は、だからこの集落の墓地に埋められている。

ひととおり話をうかがい、ぼちぼち帰ろうかと腰を浮かせたとき、奥さんが人間タンクは「おし」だったともらした。

「おし」「松本清」「岐阜出身」。この瞬間、わたしの頭のなかで三つの言葉がつながった。

岐阜県大垣市在住だった安田里美本人から、人間ポンプの基本を教えてもらった、いわば師匠が、三重県を本拠とする見世物の一座にいた「おしの人」で、「松本清」という名前だったという話を聞いていたことを思い出したのだ。

松本清が、どのようにしてこの土地にたどりついたのか、もはや知る手だてはない。しかし、インタビューのために足しげく通った安田里美の自宅から高知の山中まで、二人の芸人を結ぶ一本の糸がたしかに見えた瞬間だった。

人間ポンプ・胃袋魔人公演ポスター
福岡市のストリップ劇場公演で使用
昭和30年代か　個人蔵

※文中、今日では不適切と考えられる表現がありますが、筆者が話を聞いた人物の発言として、時代背景やインタビューの状況、筆者の意図を尊重し、そのまま掲載します。

ニセモノとミセモノ

川村清志　国立歴史民俗博物館准教授

ニセモノの意義

二〇一五年の春、国立歴史民俗博物館で開催された「大ニセモノ博覧会」では、古今東西のさまざまなニセモノが展示された。旧家に残されたニセ骨董品から、偽造酒の製法やコピーレコード、学問の根幹を揺るがした捏造事件まで紹介されていた。社会的に何らかの価値を有するものには、さまざまなニセモノが生み出されてきたことに驚かされる。ただこの展示の趣旨のひとつは、ニセモノにも社会的、文化的な意義があったという点である。博物館の複製品は、広い意味でのニセモノだが、オリジナルの代わりに展示に利用することもできる。骨董品や書画なども、なかばニセモノと知りつつ、社会関係を切り結ぶための仕掛けとして、購入されることもあったという。

写真1：国立歴史民俗博物館「大ニセモノ博覧会」の人魚展示風景

ミセモノという仕掛け

近世以来、都市部で賑わったミセモノは、一見、本物らしさをまとい、見る者を幻惑する。日常的な感覚を撹乱し、常識的な判断を揺り動かす。しかし、ミセモノの多くは、どこかでいかがわしさや猥雑さをまとって表象されている。これらはニセモノであり、虚構であるというメッセージが、舞台や装置のそこここに見え隠れする。「親の因果が子に報い」といった口上や、蛇女、牛女、さらに人魚などは、そういったイメージを体現するものでもある。

むしろミセモノは、ニセモノ的な側面を垣間見せることで、都市という空間の柔軟さ、融通無碍さを獲得しているとも言える。そこで醸成される眼差しは、見世物小屋にあらわれるさまざまな障害者たちにも向けられていただろう。確かに歪で非対称的ではあるが、非日常の片隅で彼らと人びとが邂逅する場として、見世物小屋は存在していた。虚構の皮膜を通すことで、忌避された現実へと人びとを接近させる回路が、ミセモノにあったのではないだろうか。

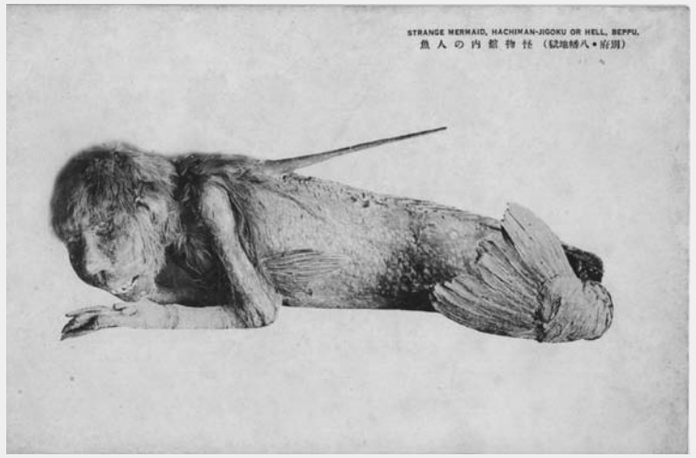


写真2：別府怪物館（現在は閉館）の人魚の絵葉書　個人蔵

写真3：絵看板　謎の人魚　志村静峯作　昭和30年代　個人蔵

好奇の眼差し

ちなみに「大ニセモノ博覧会」の目玉のひとつが、人魚のミイラであった（写真1）。これは、サルの上半身と魚（今回は鮭）を継ぎたして、特殊な溶液に浸して作られている。このような人魚は、近世から盛んに制作され、ミセモノともなっていた（写真2）。今回、展示された人魚は、伝統的な製法に則って制作された、本物のニセモノである。

さらにニセ人魚は、遠くヨーロッパにも輸出されていた。それらは彼の地の見世物小屋で紹介され、のちには博物館に保管されることにもなった。当時の博物学者にとって、極東の地、日本は、人魚のような摩訶不思議な生物が生息する場所とみなされていたのである。ミセモノとニセモノに共通するのは、このような未知なる存在への好奇心に他ならない。現代の見世物小屋の絵看板にも、そのような眼差しは受け継がれているのだろう（写真3）。

ミセモノとニセモノへの好奇の眼差しを客体化することで、人は自分たちの生きる世界を見つめ直すことができるのかもしれない。博物館の遠い系譜にもあたるミセモノを再表象する展示は、改めてその文化的な役割を体感する仕掛けとなるはずである。

○○してみました世界のフィールド

ネパールで水牛肉を加工し、売り、食する

中川（なかがわ） 加奈子（かなこ）
南アジア研究国立民族学博物館拠点 拠点研究員

肉屋の店番をしてみました

お祭りでの先触れ太鼓を叩くために整列したカドギの人びとと一緒に

「朝いちばん早いのは……」という歌があるが、カトマンズで朝いちばん早いのは肉屋ではないだろうか。日付が変わってしばらく経った早朝２時、まだ真っ暗なうちから、彼らの１日は始まる。

一日密着取材へ

わたしは、カトマンズにおいてカーストに基づく役割を肉売りとするカドギとよばれる人びとの調査をしている。カトマンズの肉屋の店頭には、水牛、ヤギ、鶏、豚の肉が、むき出しのまま迫力ある姿で並んでいる。肉は早朝に解体されたものである。ネパールの一般家庭には冷蔵庫がそれほど普及していないので、その日に食べる分だけ屠畜（とちく）する方針が徹底されているのだ。

鶏、ヤギ、豚の屠畜解体は店先で見せてもらえるが、水牛だけは「朝早いから」「たまに暴れてあぶないから」などの理由で断られることが多かった。調査に興味をもってくれたカドギの友人が「うちに、泊りがけで見学に来たらいい」と誘ってくれた。その友人は二〇代であったが、自宅の一階部分でおこなわれる水牛の屠畜を、危険だという理由で親に止められ、まだ見たことがないという。わたしの見学をきっかけに自分も見てみたいということで、店主である父親から一日密着取材する許可を得た。

水牛の肉屋。冷蔵庫を持つ店も増えてきた

屠場の風景

午前二時過ぎごろ、ジェネレータで煌々（こうこう）と照らされた屠場で解体作業が始まった。この一家は代々、水牛の解体と肉売を稼業としてきた。ここでは、毎朝五頭の水牛が解体される。従業員は一〇名いて、友人の父親、母親と長男（友人は三女にあたる）、カトマンズ盆地外出身のカドギ三名、ムスリム一名、チェットリ三名である。カーストが上位のチェットリ（クシャトリヤのネパール語表現）や、ムスリムが、屠場でともに働いているのである。

解体作業は手際よく進められる。まず、ハンマーで眉間を叩き、気絶して転倒した水牛を、ムスリムの男性がハラール肉とするために首から頭部を切り落として放血する。続いて、ナイフで腹を切り、皮を開く。そのあとの作業はすべて皮の上でおこなう。内臓を取り出し終わったところで、ナイフをノミにもち替え、肉を骨から切りはがしていく。チェットリの女性が棒を使って骨から骨髄を取り出す作業を、彼女の息子である少年が頭部の解体を、母親と長男が腸を洗う作業を担う。こうして、一頭の水牛は、脳、目、舌、鼻、耳、肉（脾臓（ひぞう）、肝臓含む）、腎臓、心臓、食道、肺、骨髄、脂肪、血液、尾、皮、足という部位に解体される。ここまで、ものの三〇分である。

屠場で働く人びと。女性は腸を洗う役割を担う

水牛肉を使ったモモ（ネパール風蒸し餃子）

★ ネパール、カトマンズ

写真を撮りノートをとっているわたしと興味深そうに見学している友人のそばにときどき母親がきて、この部位の名前は何、いくらで売れるなど解説してくれた。ナイフやノミさばきを習得するには、半年から一年はかかるという。また、家族以外の従業員のうち五名は地方出身の大学生で、早朝、屠場でのアルバイトのあと大学に通っているのだという。

店頭で帳簿をつける

五頭の解体作業が終わり、辺りが明るくなってきたところで、二頭分の肉をトラックに積みカトマンズ中心部に位置する母親の実家一階部分にある肉屋に運ぶ。残りの一頭分は友人の家の軒先にある肉屋に、二頭分の肉や余った臓物は付近のローカル食堂に送る。

母親の実家の肉屋は午前七時前に開店した。この店では、長男が店番を務める。長男が客の要望に応じて肉を切りわけ秤（はかり）に乗せ、わたしはお金の受け渡しと帳簿に顧客の名前と購入部位と購入量をメモする役割を分担することになった（友人は自宅で昼食作り担当）。長男は「兄弟」と互いによび合う同じカドギ・カーストの人びとには一割引で肉を売る。「兄弟」たちは、肉を自宅や道端の店で転売して、その一割で利益を出している。メモによると、その日の肉はカドギの「兄弟」が転売目的で六件計一三〇キロ、中国人を含むレストラン経営者四件が計一〇〇キロ、ムスリムの肉屋が五〇キロ（「兄弟」と同様に一割引で販売）、国連機関で働くアメリカ人を含む個人客三件が約二二キロという具合に買われていった。午前八時四五分、店に置いていた肉が売り切れた。

店を閉め、友人の家に戻って昼食をとる。メニューは水牛のミンチ入りのダルスープ、水牛の食道と野菜のカレー炒め、漬物、ご飯。とびきり新鮮な肉でできた昼食を美味しいいただいた。「うちにとって水牛は野菜だよ」と友人は笑う。しばらく午睡したのち、今度は夕食の買い出しに来る個人客のために、家の軒先にある小売り専門の肉屋を開ける。肉を売り切り、店じまいをするのが午後七時ごろ。その後、夕食をとり午後九時前には眠りにつく。翌日の朝も早い。

肉屋からみえるネパール

肉屋を訪れる客の顔ぶれは多様であり、肉をめぐる規範は、カーストや民族、宗教を超えて日々更新されている。代々肉屋をやってきたカドギのなかには「もう自分たちがコントロールできる仕事ではなくなった」と違う仕事をするものが増えてきているが、逆にもともと肉屋ではないカドギのなかで「どんなときでも肉は絶対に売れる」と新規参入するものも増えている。上位カーストやムスリム、中国人などが関わる肉屋の日々の営みに、グローバル時代のネパール社会が凝縮して見えるような気がした。

みんぱく
Information

特別展
「見世物大博覧会」

本展では、江戸から明治時代にかけて大いに流行し、現代に至るまで命脈を保ってきた見世物の世界を、絵看板、錦絵、一式飾りや生人形（いきにんぎょう）など、さまざまな資料をとおして紹介します。

会期　9月8日（木）～11月29日（火）
会場　特別展示館

絵看板 軽業・足芸一座

■関連イベント
みんぱく×MBSラジオ presents
「浜村淳がせまる！驚きと幻想の見世物大博覧会」

タレントの浜村淳さんとMBSの若手アナウンサーをお招きし、笹原亮二（本館 教授）と特別展「見世物大博覧会」の魅力に迫ります。

日時　9月10日（土）14時15分～15時30分（13時45分開場）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料、当日先着順（当日は無料観覧日です）

「人間ポンプ 安田里美 浅草木馬亭公演」上映会

日時　10月16日（日）14時～16時（13時30分開場）
会場　本館第5セミナー室（定員90名）
司会　笹原亮二（本館 教授）
解説　鵜飼正樹（京都文教大学 教授）
※申込不要、参加無料、当日先着順

企画展
順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展「台湾原住民族をめぐるイメージ」

学生たちがとらえた原住民族のイメージが表現されたポスターを展示するとともに、イメージとむすびつく原住民族の物質文化を紹介します。

会期　10月4日（火）まで
会場　企画展示場

李翊慈「祝祭の石板――豊年祭」

展示イベント
「ハチュカル――アルメニアの十字架石碑をめぐる物語（仮）」

本展では、ハチュカル（アルメニア石十字架）を展示の中心として、写真パネルと解説パネルにより、キリスト教を世界で初めて国教化したといわれるアルメニアの歴史と文化を紹介します。

会期　9月29日（木）～10月11日（火）（予定）
会場　本館ナビひろば（予定）

みんぱく映画会
第34回ワールド・シネマ「禁じられた歌声」

西アフリカ・マリ共和国のトンブクトゥを舞台にした注目作。過酷な状況の中での人びとの静かな抵抗と自由への叫びを通して、今、世界で起きている出来事について考えたいと思います。

日時　9月22日（木・祝）13時30分～16時（13時開場）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
※入場整理券を当日11時から本館2階観覧券売場にて配布

インフォレストすいたでみんぱくフェア開催

エキスポシティのインフォレストすいたで、9月1日（木）～10月31日（月）まで、みんぱくフェアを開催いたします。ミニ展示や楽器の体験、参加型のプレゼント企画などを実施します。

カレッジシアター
「地球探究紀行」

みんぱく教員が執筆した臨川書店発行「フィールドワーク選書」を中心にお話しします。

時間　13時～14時30分
会場　あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※事前申込（参加状況により当日受付あり）、参加費各回1000円（定員各回50名）

共催　産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団

9月14日（水）
音楽からインド社会を知る――弟子と調査者のはざま
講師　寺田吉孝（本館 教授）

9月28日（水）
大地の民に学ぶ――激動する故郷、中国
講師　韓敏（本館 教授）

お申込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

●無料観覧日・休館日のお知らせ

9月10日（土）、9月11日（日）及び9月19日（月・祝）は、本館展示と特別展を無料で観覧いただけます。ただし11日と19日は自然文化園（有料区域）を通行される場合、入園料が必要です。

※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

【瀬戸内国際芸術祭2016連携事業】

巡回展「ワンロード――現代アボリジニ・アートの世界」
会期　9月19日（月・祝）まで
主催　香川県立ミュージアム

巡回展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにざぐる」
会期　10月8日（土）～11月27日（日）
主催　香川県立ミュージアム
国立民族学博物館
千里文化財団
会場　香川県立ミュージアム
休館日　月曜日（祝日の場合は翌日）

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　　みんぱくフェイスブック　http://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　http://twitter.com/MINPAKUofficial　　電話でのお問い合わせ　06-6878-8560（本館 広報係）

みんぱくゼミナール

時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です）

第460回9月17日（土）
軽業の系譜と民俗芸能――特別展「見世物大博覧会」から
講師　笹原亮二（本館 教授）

古来演じられてきた軽業は、その後田楽や大神楽に引き継がれ、やがてそれに魅了された各地の人びとが自ら演じ、民俗芸能として伝来するに至りました。そうした軽業の系譜と民俗芸能について考えます。

継ぎ獅子（愛媛県今治市 多伎神社）

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域（国）の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。4月からテーマによって実施時間が30～60分になりました。

9月4日（日）14時30分～15時15分
本館ナビひろば
民博所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の来歴をたどる
話者　林勲男（本館 准教授）

9月25日（日）14時30分～15時15分
本館展示場（東南アジア横休憩所→中国地域の文化展示場）
宗教と文字から見た中国――中国展示のひとつの見方
話者　横山廣子（本館 教授）

※申込不要、参加無料（要展示観覧券）

●みんぱく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通無料送迎バスを特別展「見世物大博覧会」会期中に運行します。

運行日　9月8日（木）～11月29日（火）の土曜・日曜・祝日
　　1日11往復、所要時間10分
運休日　11月3日（木・祝）、5日（土）、6日（日）
※万博記念公園でイベント開催の場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

国立民族学博物館発

時	国立民族学博物館→万博記念公園駅
10	50
11	20
12	30
13	00　30
14	10　40
15	10　40
16	30
17	00

大阪モノレール
万博記念公園駅発

時	万博記念公園駅→国立民族学博物館
10	06　36
11	06　36
12	46
13	16　46
14	26　56
15	26　56
16	
17	

刊行物紹介

■広瀬浩二郎 編著
『ひとが優しい博物館――ユニバーサル・ミュージアムの新展開』
青弓社　2,000円（税抜）

いま注目を集めるユニバーサル・ミュージアムとは何か、その実践例にはどのようなものがあるのかを、力強いメッセージを込めて紹介する。障害者差別解消法が施行され、合理的配慮という考え方も広まりつつある。そのような社会背景も押さえながら、博物館から私たちの生き方を変えようとする提言に満ちた一冊。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　本館第5セミナー室（定員96名）
※当日先着順、会員証提示（会員外500円）

第459回　10月1日（土）13時30分～14時40分
見世物の昭和・平成――人間ポンプ・安田里美のライフヒストリーから
講師　鵜飼正樹（京都文教大学 教授）
忽然と祭りの場に現れ、姿を消す見世物小屋。その中で見せられる珍奇なものや奇想天外な演目。見世物は「見る側」にいる私たちには〝非日常〟の存在です。一方で、仮設興行のひとつである見世物は、短期間に多くの集客を図るため、演目に工夫をこらし、巧みな「見せる」仕掛けを作り上げてきました。昭和と平成を生きた見世物小屋芸人・安田里美の生涯を追いながら、「見せる側」からみた見世物興行の実態に迫ります。
※講演会終了後、特別展見学会をおこないます（会員外要観覧券）。

第460回　11月5日（土）13時30分～14時40分
エジプトにおける空手道の新地平――大衆文化にざぐる中東のいま
講師　相島葉月（本館 准教授）

第73回体験セミナー
目と舌で知るネパール――映像鑑賞と国民食「ダール・バート」を手で食べる
9月30日（金）、要事前申込（開催地・東京）

【東京】連続講座
「素顔の地球に出会う――人類学者たちのフィールドワーク」
会場　モンベル渋谷店5Fサロン
時間　各回ともに13時30分～15時30分
※要事前申込、会員証提示（会員外1000円）

9月10日（土）
人間にとってスイカとは何か――カラハリ狩猟民と考える
講師　池谷和信（本館 教授）

11月12日（土）
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師　佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室 主幹）

味の根っこ

パプアニューギニアの石蒸し地炉料理

ムームー

深川宏樹（ふかがわ ひろき）　民博 機関研究員

地炉にバナナの葉を敷き、食材を並べたところ。既に蒸気が立ち込める

男たちの怒号

早朝、まだ朝霧の漂う森のなかに男たちの怒号が飛び交う。「もっと近づけ！　近づけ！」「今だ！　叩け！　叩け！　叩け！」。巨大な木製の棍棒を頭上にかかげた若い男が、周りの年長者たちの指示を受けながら、豚の眉間に狙いをさだめる。棍棒が勢いよく振りおろされ、体躯（たいく）のよい豚がドサッと横倒れになる。あたりからどっと笑い声が沸き起こるやいなや、男たちはすばやく次の作業にとりかかる。パプアニューギニアのピジン語で、ムームーとよばれる石蒸し地炉料理の始まりだ。「早くこっちへ持ってこい！」「まだだ！　もっと背中側を焼け！」。血気盛んな男たちの、なんとも豪快な調理の過程に息をつく暇などない。「さあ早く！　次！　なにをやってるんだ！」。

ムームーとは、掘った地面に、熱した石を敷き詰めて、その上にバナナの葉で覆った豚肉、サツマイモ、バナナ、食用シダ、葉野菜などをおき、さらにその上から土をかけて蒸し焼きにする料理である。こうして出来上がった地炉（アース・オーブン）のなかは、焼かれた石の蓄熱によって高温になり、食材に火が通る仕組みだ。蒸し焼きにするために食材には水を振りかける。ムームーはパプアニューギニアの伝統的な調理法のひとつであり、村落の人びとにとって馴染み深いものであるだけでなく、観光客にも提供されている。素材の旨みが丸ごと引き出されるだけでなく、シダの葉の香ばしい香りがついた豚肉は絶品であり、サツマイモにところどころできた「お焦げ」も捨てがたい。また、豚の脂が浸み込んだ葉野菜は、いつもと違った味わいを醸し出す。

解体前の豚

豚肉は御馳走

わたしの暮らしたニューギニア高地は、わりと淡泊な味のサツマイモが主食であり、日本と比べると、食生活は単調である。もちろん、タロイモにヤムイモ、各種の豆や葉野菜、カボチャ、バナナ、トウモロコシ、サトウキビなど多彩な食材があるのだが、食卓にのぼるのはサツマイモだけであることが多い。村の人たちは二〇種類以上ものサツマイモを識別でき、またその味を区別できるようだが、わたしが見分けられ、味を区別できたのは、せいぜい四、五種類であった。それらサツマイモの味の違いを楽しむのもまた一興ではあるものの、脂のたっぷりのった肉の味が恋しくなるものである。だからこそ、豚肉を使ったムーム一料理はわたしはもとより、人びとにとってもまたとない御馳走（ごちそう）となっている。

ムームーされた豚肉が広場に並べられ、夫方から妻方の親族に贈与される

家庭用の鶏肉ムーム一料理。娘の誕生日を記念して。人びとが比較的よく食べるのは、豚肉よりも鶏肉、羊肉。しかし、それらの肉を手に入れるのは難しい。そのため、豚肉には劣るが、鶏肉や羊肉も滅多に食べられない御馳走である

娘や姉妹が旅立つとき

一頭から五頭以上の豚肉を調理する大規模なムームーは、大きな穴を掘る作業から、たくさんの石を焼く薪（たきぎ）の準備、豚の屠畜（とちく）と解体、そして食材をうまく並べてバナナの葉で覆って土をかける作業まで、男性たちが協働する力仕事である。もちろん、女性たちも豚の内臓を川で洗うなど、調理過程で一定の役割を果たす。だが、メインはやはり屈強な男たちである。とくに豚を上手に解体できるか否かは、一人前の男性の指標でもあり、若い男は我先にと、その役をかってでる。

しかし、村落で豚肉を食べられる機会は、一年のなかでも、そう多くはない。例えば、ニューギニア高地では男女が結婚する際に、男性の親族から女性の親族へと婚資としてムームーで調理された豚肉が贈られる。これこそが、人びとが豚肉を食べられる数少ない機会のひとつである。豚肉のムームーは、このようにハレの料理であると同時に、特に花嫁の両親や兄弟にとっては娘や姉妹が嫁いでいく、その日に食べるものでもある。それまで毎日一緒に暮らし、そんな生活がいつまでも続く気がしていても、娘や姉妹はいずれ離れるときがくる。ともに過ごした日々を想いながら、豚肉の味に嬉（うれ）し涙が一筋流れる。家族みんなで豚肉にかぶりつく間に、ふとおとずれる沈黙に、そんな気持ちがムーム一料理の隠し味になっているのではないか、そう思うことがある。

ムームー（一般家庭用、4人分）

豚肉	1kg
サツマイモ	3kg
調理用バナナ	10本
キャベツ	1玉
ゼンマイ	大量
バナナの葉	10枚ほど

① 庭に直径50～70cm、深さ20～30cmほどの穴を掘る。

② サツマイモと調理用バナナの皮をむく。食材を適当な大きさに切る。

③ 薪を燃やして（あるいはガスコンロやオーブンで）、こぶし大の石を10個ほど熱する。そして、熱くなった石を穴のなかに敷き詰める。

④ 石の上に、バナナの葉を何枚も重ねながら並べ、その上に食材を敷き詰めてゆく。

⑤ 食材に水を振りかけ、バナナの葉で上から覆い、土をかけて蒸し焼きにする。

⑥ 4、5時間たったら、土を除き、バナナの葉を取り払って、新しいバナナの葉の上に食材を並べれば、完成。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

消される声
——カタルーニャ独立運動のなかの人間の塔

岩瀬 裕子（いわせ ゆうこ）
首都大学東京大学院 博士後期課程

スペイン・カタルーニャ州で二〇〇年以上にわたって続けられている人間の塔。遺産の政治利用が高まる一方で、そこから見えなくなってしまうものとは？

強まる独立運動の象徴

近年、地中海に面するカタルーニャ州ではスペイン政府から独立しようとする機運が高まっている。そのなかで、一際、象徴的に政治利用されているのが人間の塔である。人間の塔は、カタルーニャのお祭りなどに登場してくる伝統芸能のひとつで、ひとがひとの肩の上にのぼり作られる。カタルーニャ語では、城を意味するカスティス（*Castells*）とよばれ、通常六段以上の塔を指す。

ニューヨークタイムズ紙（二〇一四年一一月七日付け電子版）は「みんなの力でひとつの塔をつくる」というその過程が「みんなの力でひとつの国をつくる」という独立に向けての過程と重なるとして、人間の塔を独立運動のモチーフとして報じた。世界的ビッグクラブであるFCバルセロナのスタジアムでおこなわれた「自由のためのコンサート（二〇一二年）」や九月一一日の「カタルーニャの日」に開かれるデモにおいても、人間の塔はカタルーニャ文化を担って登場している。

1段あたり4人の合計9段の人間の塔。落下を防ぐために下から2段は複数人の支えに囲まれている。上から3段目までは、ヘルメットを着用した子どもが乗ることが多く、2人の段の上に1人がしゃがみ、さらに1人乗っている

高くなる塔

その人間の塔が、独立運動の高まりと呼応するかのように高くなり続けている。現在の最高は一〇段、高さは一五メートルを超える。塔の上にのぼる小さな子どもから、その道五〇年近い白髪のベテランまで老若男女が力をあわせて、ひとつの塔をつくる。二〇一六年五月末日現在、カタルーニャ州にはコリャ（*Colla*）とよばれる人間の塔のグループがちょうど一〇〇あり（養成中のコリャ含む）その数は年々、増加している。

それぞれのコリャは専用の練習場をもち、週二〜三回の練習をおこなう。そして週末に開かれる各市町村のお祭りや、二年に一度、共通のルールをもとに勝者を決める競技会などに参加している。もちろん、高さよりもメンバーの親睦をおもな目的に置いているコリャもあるが、それでも前の年よりは少しでも高く、またそのコリャの歴史のなかで、まだ打ち立てたことのない新しい塔に挑戦しようと、汗を流している。現在では、小さなお祭りを含めると、ほぼ一年中、各市町村の広場などで人間の塔を目にできる。

競技会を前にしたコリャの練習場

人間の塔の起源とされる「バレンシア人たちの踊り」。Almirall, Josep 2011 *Castells*, Triangle Postals SL, Menorca. p237より

公式的なお墨付き

その人間の塔がユネスコの無形文化遺産に登録されたのが二〇一〇年一一月のことである。ユネスコによると「人間の塔は文化的アイデンティティに欠かすことのできないものとしてカタルーニャの人びとに認識されている」とし、二〇〇年以上にわたって続けられているその継続性を評価しつつ、人間の塔が「カタルーニャ」の文化であることを強調している。しかし「文化的借り物から二一世紀の世界遺産へ」と題された論稿があるように、そもそも人間の塔は、カタルーニャ州の南でみられた「バレンシア人たちの踊り」に起源があるとされている。その踊りは、踊りの最後に小さな塔をつくるが、カタルーニャ州に伝わってからはその塔の部分だけが残り、現在のように高さを求める人間の塔へと分化していったという。つまり、バレンシア州とカタルーニャ州の混成文化である人間の塔が、ユネスコによるお墨付きにより公式的に「カタルーニャの伝統文化」として保護が不可欠な遺産へと位置づけられたのである。

独立に賛成？ 反対？

人間の塔の専門雑誌は、これまで政治から距離を置いてきたコリャがカタルーニャ州の独立を支持する立場であることを伝えている。というのも近年、人間の塔の露出は確実に増えている。独立の是非を問う国民投票のためにヨーロッパの都市に出掛けて取材を受けたり、独立を訴えるデモに駆り出されて大勢の前で塔を作ったりと、人間の塔を広めたいものにとって独立運動は格好の場となる。逆に、独立運動に関心がなくても迫力ある人間の塔を見ようと大観衆が埋め尽くす広場は、独立を進めるものにとって絶好の場となる。人間の塔があるところに必ずカタルーニャ国旗がある。どこからともなく「独立」コールが沸く。こうして無意識のうちに目にする風景や音、熱狂や汗といった記憶とともに、わたしたちは「カタルーニャ」を創り上げ、そこに「独立の象徴」としての人間の塔を重ねていく。落下しまいと必死にこらえる塔には、独立の是非に関係なく、ただ単に人間の塔が居心地のよい場だからというものがいるにもかかわらず。

物語る服、服の物語――行司千絵の手しごと

村松美賀子　京都造形芸術大学准教授

大量生産された既製服があふれる現在。手づくりの普段着を作ることには、どのような意味があるのだろうか。行司千絵さんの服づくりは、そのひとつの答えなのかもしれない。

行司千絵さん。自作のカーテン生地のブラウスを着て「日曜洋裁」する

「日曜洋裁」としての服づくり

行司千絵さんの服を初めて見たのは、小説家いしいしんじさんのサルエルパンツだった。画家・猪熊弦一郎の絵柄の風呂敷を使った、目に楽しいパンツ。片足だけ柄になっていて、遊び心がありつつ凝っている。何より、いしいさんによく似合っていた。それまで見たことのない手づくりの味わいと、着るひとにしっくりなじむ感じがとても新鮮だったのだ。

行司さんはあくまで趣味として、独特の服づくりをするひとだ。奈良に住み、京都の新聞社で働きながら、週末になると押入れからミシンを出してきて、服を作る。幼いころから手芸は好きだったが、洋裁を習ったことは一度もない。行司さんいわく「日曜大工」ならぬ「日曜洋裁」である。

一〇年ほど前、三〇代半ばで自分の服を作りはじめてから、自身のお母さん、さらには友人知人の服を作るようになった。数でいうと延べ六〇人、一五〇着以上。行司さん自身の服を入れたら、二三〇着を超えている。今ではコートのようなアウターや革のアイテムなど、高度な技術が必要なものも手がける。

これだけ時間と手間をかけ、腕前も上げているのに、行司さんは服を作って収入を得たり、ブランドを始めるつもりはない。自身の服づくりに対する立ち位置を、ぶれることなく貫いている。

お母さん。行司さんの服を着ることで「自分らしさ」をより考えるようになった

「おうちのごはん」の感覚で、服を作る

行司さんは自分の服を「おうちのふく」という。家のごはんを作る感覚で、相手の喜ぶ顔を思い浮かべてする素朴な手しごと、と言えるだろうか。

着るひとが決まっている服づくりはオーダーメイドのようにも思えるが、そうではない。行司さんの場合、アイテムの希望や好みの色、着丈などのリクエストは聞くものの、そこからはすべて任せてもらう。作る前に採寸はするが、途中の試着や調整などもおこなわない。

それは、「プロではない」自分が、誰かに服を作るとはどういうことかを考えて行き着いたやりかただった。制作半ばでやりとりすると、こうしようという気持ちがぶれてしまいかねない。一切を任せてもらうなかで、そのひとのふだんのスタイルや好みを考え、似合う服をイメージして、かたちにする。そうして相手を思いながら、自分が好きでないものは作らない。

そこにあるのは、言われたとおりに作るのでも、自己表現のための制作とも違う、そのひとらしさを引き出す服づくりだ。だからこそ、知っているひとにしか作らないし、作れない。そして、ふたつと同じものもない。家のごはんは家族の好みや体調などを考えて味をかげんするように、「おうちのふく」も着るひとありきなのである。

着るひとが紡ぐ、豊かな「ふだん」の物語

行司さんの服は口づてで評判となり、京都や東京のギャラリーで展覧会が開かれるようにもなった。作ったひとに声をかけ、集めた服を展示したのだが、いずれも着るひとの時間が服を育てたと感じられるものだった。行司さん自身も、作った記憶は手や頭に残っていても「自分の服」とは思わなかったという。そのひとを思って作った物語のある服は、着るひとによって、あらたな物語が紡がれていたのだった。

黒の好きな友人・山下賢二さんには、黒のダッフル

行司さんの「おうちのふく」のように、家族や親しいひとに服を作ることは、一九七〇年代ごろまではごく一般的だった。しかし、既製服を買うことが当たり前になってしまってからは、「手づくり」は日常から遠ざかってしまったのである。

しかしまた、二〇〇〇年代に入ったころから、若い世代を中心に雑貨や服を作ったり、リメイクすることがもてはやされるようになった。各地のクラフトフェアでの出展も多いし、ハンドメイドの品を扱うサイトなども人気がある。それは若い世代の新鮮な体験であるとともに、自己表現や自己実現の要素も大きいように思える。

行司さんの服づくりは、その流れとは一線を画し、かつての生活の手しごとにつらなっている。家のごはんを作るように、着るものも作る。プロが手がける完璧さとは異なる、飽きのこないふだんの服。それは、作り手の思いがこもり、着る側が自らになじませていく進行形のかたちであり、ものづくりの根本的なありようではないだろうか。身近なひとを思う手しごとは、ひとの生活やありようを息づかせ、じわじわと変えてしまう、そんなものであることをあらためて思い起こさせてくれる。

※写真はすべて京都造形芸術大学Webマガジン「アネモメトリ」より転載。撮影・森川涼一

消えゆく名前？――バリ島の名付けと少子化

What's in a name?

吉田（よしだ） ゆか子（こ）　東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所助教

バリ島民の約八割がヒンドゥー教徒であるが、彼らの名前は多くの場合、敬称や称号、出生順の名前、そして個人名から構成される。出生順の名前とは、子どもが生まれた順にワヤン、マデ、ニョマン、クトゥットと付けるもので、五番目はまたワヤンに戻る。「戻る」という意味の「バリック」をくわえ、ワヤン・バリックとするのである。昨年民博でおこなわれたバリ島仮面舞踊劇公演「息づく仮面」には、バリ人舞踊家イ・クトゥット・コディ氏とイ・マデ・マハルディカ氏が出演したが、彼らはそれぞれ第四子と第二子である。ちなみに、最初の「イ」は男性に付く敬称で、女性の場合は「ニ」が付く。ワヤンの代わりにプトゥやグデ、マデの代わりにカデッやヌンガ、ニョマンの代わりにコマンの名が用いられることもあるが、いずれにしても限られた名前が繰り返し使われ、やたらと同名が多くなる。

これらの名前は、覚えやすいがややこしい。調査では多くの人に出会うが、特にバリに通い始めのころ、バリ人の顔の見分けが付かずよく混乱した。宿で働く二人の青年がともにワヤンさんだったため、しばらく同一人物と思いこんでいたこともあった。

出生順の名前に加え個人名も付く。先述のイ・クトゥット・コディ氏の場合「コディ」が個人名だ。個人名で人をよびわければ混乱も避けられるが、（特に成人の場合）あまり呼び名に用いられない。昔の研究によれば、成人や死者を個人名でよぶのは無礼なことだった。現在は個人名でよぶ場面も無くはないが、○○村のワヤンなどと地名で区別したり、あだ名でよんだりすることが多い。子や孫の個人名を使って、○○の父、○○の祖父などとよぶ地域もある。

なお、バリにはカスタとよばれる、カーストに似た身分制度があり、平民以外の上位階級出身者には、先述のイや二の敬称に代えて階級をあらわす称号が付く。彼らは、称号だけか、称号＋出生順の名前でよばれることが多く、ますます個人名の使用は稀となる。子が生まれると「お父様」や「お母様」という意味の敬称も加わる。他の研究者も指摘するように、バリの呼び名では、カスタ上の地位や、（父や祖父といった）社会的役割を示すことが優先され、個人をよびわけることや、個人の個性を表現することはあまり重視されないのである。

ところで、近年のバリは急速に少子化が進んでいる。わたしが下宿した家の主人は、六人きょうだいだったが、そのきょうだいたちはみな二～三人の子どもしかもうけなかった。政府は人口抑制のために子どもを二人までとする家族計画を推進しており、また近年の養育費の高騰から、子どもを多くもてない夫婦もいる。結果、ワヤンとマデだけというきょうだいが増えた。このままいけば、クトゥットの名は希少となるであろう。

そのようななか、バリ特有の名前を保存するため、四人子どもをもつべきだ、という意見が聞かれるようになった。ある村では、国が推進する家族構成を表現する両親と子ども二人の石像に代えて、新しく両親と子ども四人の石像が設置された。村長は従来バリでは子どもを四人もつことが良しとされてきたと主張したという。石像の設置理由が名前の保存だけだったのかは定かではないが、いずれにしても、消えゆく名前が、国が唱える理想の家族像と異なる、バリらしい家族のあるべき姿を模索する議論のきっかけとなっており興味深い。

月刊みんぱく 2016 9月号

編集後記

7月末から8月初めにかけて、関係している国際学会がウィーン大学で続いたので、この夏はウィーンで3週間過ごした。会議の合間、往年のウィーンを知る90代の知人女性と話す機会があったのだが、わたしが「驚異」に関して研究しているというと、戦前のプラーター公園の話をしてくれた。250年前からウィーン市民に親しまれてきた行楽地で、映画「第三の男」に登場する大観覧車があるプラーター遊園地は、観光スポットとしても有名である。

そのウィーンっ子によると、戦争で焼けてしまう前のプラーターには見世物小屋が並んでいて、『ガリバー旅行記』に登場する小人の国である「リリプット」とよばれていた小さい人や、四肢の無い人などが世界の「ヴンダー」（驚異）として見世物になっていたという。こうした興行は障がい者差別とみなされるようになり、遊園地からは姿を消した。昔の名残を感じさせるリリプット列車や洞窟列車がノスタルジアを誘うが、眺めているだけで内臓が飛び出そうな落下系、回転系の絶叫アトラクションに比べると今や影が薄い。

日本の見世物も同じような運命を辿（たど）ったのであろうが、「不都合・不適切・不快」なものを排除して、隠してしまうことで果たして社会は健全になったのか。考えさせられる。（山中由里子）

●表紙：お化け人形　平成 28・2016 年　中田人形工芸店　中田市男氏製作
撮影・笹原亮二

次号の予告

特集

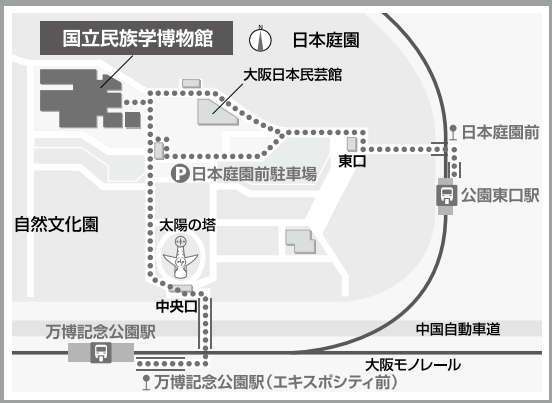
博物館とクリエーター（仮）

月刊みんぱく 2016 年 9 月号
第 40 巻第 9 号通巻第 468 号　2016 年 9 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　河合洋尚　菅瀬晶子　丹羽典生　南真木人　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

編みの文化の継承者

イヴォンヌ・クールメイトリーさん、レッド・オーカー賞受賞

本館で2点作品を収蔵しているオーストラリア・アボリジニの芸術家イヴォンヌ・クールメイトリーさんがオーストラリアで権威ある賞を受賞しました。2016年のナショナル・インディジニアス・アート・アワードにおいて、レッド・オーカー賞がその生涯の業績に対して与えられました。同賞は、オーストラリア芸術の国内外への貢献をおこなったアボリジニやトレス海峡諸島民に賛意をあらわすために設立されたものです。

彼女は、サウスオーストラリア州エア半島ウドゥナにて1944年に生まれ、クーロン湿原とリバーランド地区で育ちました。青年期の多くをマレー川の近くで過ごしており、その川沿いという自然環境は、彼女の作品にも大きな影響を与えたとされています。1982年のアートに関するワークショップに参加した際にンガリンジェリの長老から技術を習得して、オーストラリア先住民の編みの文化に開眼しました。

1987年には最初の展示を、1997年のヴェネツィアビエンナーレではアボリジニの女性2人とともに「フリューエント」というタイトルの展示おこなっています（なおそのうちの1人は、日本でも個展をおこなったことで広く知られているエミリー・カーメ・ウングワレーさんです）。今では一度は失われかけたンガリンジェリのカゴの編みを、現代の形で継承する人物として非常に高名な存在となっています。

本館で収蔵されている彼女の作品は、トゥー・シスター・バスケットとよばれる手提げ籠とヤッビー・トラップとよばれる筌（うけ）です。どちらも小山修三名誉教授によって、1992年に収集されたものです。

文・丹羽典生（国立民族学博物館 研究戦略センター）

手提げ籠
「トゥー・シスター・バスケット」
H0180869

エビ捕り用の筌
「ヤッビー・トラップ」
H0180868

※ 2 点とも展示はしておりません。

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――――会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。
電話06−6877−8893（平日9：00 ～ 17：00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。